

## 【主要なトピック】

- 「新たな翻訳モデル」で言及されている要素のなかで、テキストの音韻的特徴が持つ意味作用をどうやって特定・記述するのか、さらにそれをどう翻訳するのか

音(強弱高低、リズム、アクセント等)は、いうまでもなく言語に固有のものであります。したがって、そのまま外国語から日本語には移すことは不可能です。これが厳然たる事実であり、すべての思考はそこから出発しなければなりません。

通常を表の意味とは別に、音の配列が何らかの意味を生み出しているということは、詩においてはありうることです。ここで注意しておかなければならないのは、音の配列によって「表意」に拮抗するような意味作用が生じているかどうかということです。音がなんらかの情感を強めるというようなことは当然ありますが、それは表意への「プラス $\alpha$ 」であり、ごくありふれた現象です。表意に影響するような意味が音によって生じている場合には、生じている意味を、翻訳に入れ込まねばならないかもしれません。しかし、それを音のトリックによって表現する(すなわち原作で作者が行ったことを模倣する)のは、とても難しい作業になるかもしれません

翻訳はAなるテキストを模倣して成立した、相似形のBなるテキストを創り出す行為、もしくはそのようにして創造されたBテキストそのものを意味しますが、それを翻訳論で議論する場合には、基本的な軸として、(a)本質的な模倣であるか、(b)効果における模倣であるか、ということをもまず発想すべきです。(a)は本質的観点、(b)は機能的観点ということができます。

詩の場合には、(a)は例えば、脚韻、頭韻、1行のシラブルの数、弱強などのリズム、1聯に含まれる行数等々、音韻的形式が大きな特徴なので原作の特徴をとらえて翻訳で表現することができます。例えば、『翻訳の授業』のトールキンの詩のドイツ語訳はかなり音韻的に英語のものを模倣しています。それとは裏腹に、全体の趣旨は同じですが、細かな「表意」はかなり原作のものとは変えています。これは音韻的特徴を活

かすためのやむを得ない処置です。しかし、詩の場合には、音韻的特徴が作品としてidentityとして大きな役割を果たしているので、relevantな要素であり、そちらを採って、意味の厳密な一致を捨てることは許されます。

(b)の効果という点では、音数・脚韻などのレトリックが、そのまま移されたドイツ語・文化に存在するかどうか、という判断になります。例えば1行8音という区切りが詩的な感じを読者に与えるかどうか、ということです。

では山本の日本語訳ではどうでしょう？ まず、1聯の行数は同じです。また、1行は75調のリズムです。脚韻はありません。本質的な意味では、そもそも「詩である」というジャンルの模倣がなされ、1聯の行数が同じという以外には、模倣されたところはありません。ただし、詩語や雅語が多用されているという点では、本質的な意味でも、トールキンの意図を模倣しているということはできます。日本語訳の場合は、75調にし視覚的にも各行の長さを揃え、日本の詩法にしたがって、ある意味で独自に創作しているわけです。このような方法は(巧拙はべつとして)日本語の詩として読めるように、すなわち(b)の効果における模倣が目指されていると分析することができます。

頭韻は英語にも日本語にも存在するレトリックなので本質的な模倣と効果的な模倣が両立するようには見えますが、それを読んだ読者がじっさいにどのように感じるか、どのような印象を受けるかは同一ではないかもしれないので、必ずしも効果面の模倣(機能的翻訳)と言えないかもしれません。脚韻はふつうの日本語の詩には用いられないので、それを模倣することは、(a)の本質的模倣にとどまるでしょう。

このように、詩の場合は、作品としてのidentityを構成する要素のうち形式そのものの占める割合が大きいため、それを翻訳で表現することが重要であり、そのために表意的な意味は犠牲にすることは許されるし、実際に行われていることです。その場合、詩的な形式にも

様々の種類のもが含まれるので、特定の詩の翻訳を考える場合には、どの要素をrelevantなものと判断するかというところに翻訳者の判断が入ります。

一般に、このように、表意よりも形式を重視するというのは詩の場合にもっとも当てはまりますが、児童文学でもそのような考慮は大きくはたらく場合があります、ついで短編小説、最後は、長編小説という純に、形式のもつ重要性が徐々にも小さくなっています。戯曲はさまざまの場合があるので、一概に言うことはできません。

このように、形式的特徴と表意的内容に分けて考えることが、詩の翻訳について分析するのに有効です。というより、そのような観点から分析しない限り、主観的な感想の言い合いとなってしまう、理性的な根拠を示して理性的な人々を理性的に説得するという学問的営みからは遠ざかる恐れがあります。

また、このような観点から、ナンセンス詩はとてもおもしろいテーマといえます。エドワード・リアなどのナンセンス詩はほとんど一貫した意味はないのに、音が愛されて愛唱されています。こんな詩についてどのように考えるか、翻訳はありうるのか、どんな翻訳が望ましいかなど考えてみるのはとてもおもしろい問題です。

- 最終章で提示される新しい翻訳論について、どのような理論の歴史の流れの中に位置づけられるのか、あるいは位置づけられないのか

日本における翻訳論は、(a)規範的な研究にしろ、(b)記述的な研究にしろ、十分に組織化されていないように思います。(a)は主として翻訳家によってなされていますが、目の前に出てきた実際の英文をどう訳すかという、学問的な議論にする抽象性を欠いているものがほとんどです。(b)は伝統的になされてきた文学(作家)研究と、欧米の「翻訳学」を日本に当てはめようとする試みの2つが中心です。

大まかな言い方ですが、これらのどれも「直訳」と「意訳」という、

直感的で曖昧な区分をもとに議論がなされているように見えます。また欧米の「逐語訳」が日本の「直訳」に相当するものだというのを、無批判に受け入れています。しかし、これは正しいのでしょうか？

そもそも欧米の翻訳論の中で、「逐語訳」という概念は、語源を同じくする単語と、ほぼ同一の文法形式による置き換えがイメージされています。したがって、逐語訳といえども、言語表現としては表層的には自然なものとなることが多いといえます。

これに対して、日本語の「直訳」はどのようなもののでしょうか？

語彙を教えてくれる辞書は、基本的には、孤立した単語をリストにした単語変換テーブルです。「文法」というのは学習英文法、もしくは欧文を邦文に転換するための規則集のことです。これらをもとに翻訳する「直訳」とは、漢文の白文にレ点や1, 2点をうち、適当に助詞を入れる作業、つまり読み下し文を作る作業に相当します。「あなたがあそこに見る赤い屋根を持ち、白い塀で囲まれている家が、もしも私の叔父に属するものでなかったならば、私はあなたをそこに住ませることでしように」。これが自然な日本語だと思う人は、日本人をやめたほうがよいでしょう。

このように考えると、哲学者ジョン・サールが「コンピュータは考えていることができるか」という問題を考える際に行った、“Chinese Box”

という思考実験が念頭に浮かんできます。その結論とは、コンピュータは変換テーブルと変換規則を用いてA言語からB言語にメカニカルに変換しているがゆえに、思考しているとはいえない、ということです。すなわち「意味」を理解しているとはいえないのです。これがまさに「直訳」の正体です。このことから、「翻訳には「意識」と「直訳」の2種類ある」という前提は、いかに当を得ない、不毛の出立点であるかが分かります。

このような偽の二項対立を乗り越える考え方として、「書かれたもの」から出発する従来の翻訳観を捨て、「意味のコミュニケーション」を出発点とする、新たな翻訳論のモデルが有効ではないかと考えていま

す。これが、『翻訳の授業』の最終章で述べたことです。

現在の日本における議論では、過去の日本の翻訳を論じて、「この翻訳は直訳が中心だが、意識が混じっている」に類する評言が散見しますが、誰が見ても分かるように、このようなおよそ意味のない言語は追放して、現在の我々の見地からすると、きわめて不自然な「直訳」がなぜ過去において大手を振って闊歩し、翻訳の主流であると考えられていたのかを個人、時代、歴史、言語的徳性などの面から考察することが、翻訳論の課題であると思われます。

- 「意味空間」と「思想的文章」の関係

実用的文章にせよ、文学的文章にせよ、言葉の表現をいったん「意味空間」に引き受け、それを改めて別の言語（や記号体系）で表現する、その際、文学的文章においては「伝える事柄や情報が重層的である」という点のみが異なり、必然的に何を残し何を捨てるか「選択」が生じる。そしてこの「選択」こそ、翻訳や翻訳論における要諦である、と理解した。この見解を「思想的文章」に当てはめてみたらどうだろうか。たとえば、ハイデガーの『存在と時間』の冒頭部（英訳版）において、“the Interpretation of time as the possible horizon for any understanding whatsoever of Being”とある部分を、ある訳では、「あらゆる存在了解内容を可能にする地平として時間を学的に解釈すること」としている。とりわけ「あらゆる存在了解内容を可能にする地平」the possible horizon for any understanding whatsoever of Beingは「どんな『存在』であってもそれを何らかの形で理解しうる可能な領域」ということではないだろうか。「地平」という語は、確かにすでに、哲学用語として「熟している」が、horizenには「地平線」以外に「限界」「範囲」といった意味がある。翻訳が一番未発達な領域が、思想ではないだろうか。それは、日本語文化に「もともとない」からということもあろうし、一方で、「原書と照らし合わせながら読む」という、特殊な受容環境のこともあるかもしれない。また西洋思想関係の本を日本語で読む場合、ある種の言葉への「鈍感さ」が求められるということ（私の感覚だが）も、翻訳という行為から考えると、興味深いように見える。

思想的文章には2つの面があります。(a)客観的真実を述べたもの、であると同時に、(b)思想家個人に独特の言語体系を作り上げている、という2つの面です。すなわち、独自の語彙、概念やそれらのユニークな連関は、それにどっぷりひたった人しか理解できませんが、その一方で、「普遍的真実」を述べているという面もあります。(少なくとも思想家たちはそのように考えているはずです。)

例えば、カントは難解をもって知られますが、「カントの思想は。。。｣とあって、教科書などに紹介されてもいます。重要なポイントが誰にでも分かる形で単純な文章にできるのなら、なぜカント自身が最初からそのように書いてくれなかったのか？ と思うのではないのでしょうか？

わたしの「意味空間」は、いわば普通の散文を中心とする文学作品の翻訳を説明するための、作業仮設です。いまだ洗練を欠いている段階であり、思想的內容についてどのように考えるべきか、最終的な答えはありません。しかし、思想的テキストは、直感としては、宗教的文書や、詩と似ているのではないかと思っています。

- 「意味空間」と「解釈」の関係
- 翻訳者の解釈と翻訳について

人によってテキストの解釈は様々あるはずで、翻訳者も一読者であることが気になった。様々ある解釈も中には単純に意味を取り違えているものもあるだろうが、ベースの意味を正確に捉えつつ、それでも様々な解釈がありえ、様々な翻訳があり得る。8章の最後に示される翻訳モデルにおいて、「零度の訳」は人によってずれることはないが、そこに付け足される文学的要素は翻訳者によって変わってくるのではないだろうか。

テキストの「表意」については、一義的に決まります。決まらない場合はなぜ決まらないのかが説明できます。このことを考えるには、書き手の側を起点として発想しなければなりません。作者は概念であれ、具体物であれ、かならず何らかのイメージを抱いて書きます。その際、書かれたものを通じ

て読者の頭の中にほぼ同一のものが再現され、現実に対応するには問題がないだけの精度があるというのが、言語という人間的活動の大前提です。もちろん例外として様々なケースがありますが、例外があるからといってこの大前提を認めないのは、水とっしょに赤子を流してしまう愚であり、理性的な判断とはいえません。

このように、言語のpublicでcommonな特質によって、描き出されたideasが読者の中に実用上問題ない精度で再生されることを前提とした上で、作者は含意や文体や叙述の順序、イメージ等さまざまな要素によって、何らかの効果をあげ、解釈を導くことを狙っているのが普通です。これらは作者の「意図」と言われるものです。

それを土台にして、読者が独自の解釈をすることはもちろん可能です。文学作品の存在意義はそこにあります。

しかし、「規範的」な視点からいうなら、そのような個人としての解釈を翻訳に表現しようとするのは、ふつうの意味では望ましくありません。翻訳者は原語の普通の読者がもつ印象を客観的・分析的にとらえ、それが翻訳の読者に伝わるよう、出来る限り忠実に、明晰に表現しようとするのが仕事です。

ただし、これは絶対的な規範ではありません。個性的な解釈を許す立場もありえます。文字から文字への変換ではなく、文字から映像などへの変換の場合には、むしろ個性的な解釈を行うことが規範となっているかもしれません。

これに対して、「記述的」な観点から言うと、すでになされた翻訳を分析したときに、翻訳者自身が無意識に行っていた解釈が見えてくる場合があります。それによって翻訳者自身がどのような人物だったのかが理解できる場合があります。翻訳者が自身芸術家であり、独自の表現者である場合などには、それ自体が貴重な資料となります。また、時代がもっていたバイアスがこのような分析から浮かび上がってくるものです。そして、これこそが翻訳研究そのものです。

- 宗教と翻訳の関わり

- 「原理主義のキリスト教の宗派が「行間逐語訳」を好んでインターネットに上げている」（p.112）として、JWのウェブサイトが参照されているが、JWはキリスト教主流派からは一般に「異教」「異端」としてカルト扱いされているように思われるため、記述には留意が必要かもしれない。

ご指摘ありがとうございます。

- 欧米言語間の「逐語訳」と英日間の「直訳」との違い、英語への翻訳作品に見る「文化的優越意識、帝国主義的傲慢」の指摘。欧米の翻訳論にとって、言語間の対応関係に乏しい状況は想定外との指摘があるが、「普遍的」な翻訳論の確立は果たして可能と考えられるのか。（pp. 118-119）

普遍的な翻訳論は、「逐語訳」の特権的地位を捨てることから出発します。翻訳とは、上に述べたように、Aテキストを模倣したBテキストを創り出すことです。この定義から必然的に出てくるのは、どのような変形がなされるかということが主要問題であるべきだ、ということです。したがって、翻訳の際に、本来の「逐語訳」というものが存在し得ない（少なくとも欧米の言語と日本語ではそうです）言語環境にある日本人はより真実を見やすい立場にあります。「フォーマルかダイナミックか」「同化か異化か」など表現は様々ですが、「逐語訳」にこだわりがあり逐語訳一自由訳というバイナリー概念を抜け出せない欧米人より有利な立場にあるといえます。

- 第7章の「若者ことば」や「俗語」への言及に関連して、いわゆる「非標準英語」はどのような翻訳でそのニュアンスを伝えることができるか。黒人英語を（擬似）東北弁で訳すというような取り組みについてどう考えるか。また翻訳作品（特に映画）に見られる過度な（日常的には実際使われない）女性ことばについてどう考えるか。

これを考える際も、機能的翻訳と、本質的翻訳に分けて考えるべきで



しょう。黒人言葉を東北弁で訳すというのは、ネイティブが原作を読むときに感じる言語的差異、さらには価値的な差異を反映させようとするもので、その限りにおいて、うまい方法かもしれません。しかし、本質的な意味では、異なるものであることは言うまでもありません。白人と黒人が混じっていて、複雑な歴史をもっているアメリカの状況に相当するものは日本には存在しないので、アナロジー的に、それを表現することすらできません。

したがって、この問題は、純粋に機能的観点からの考慮となります。東北弁でなくてもよいわけです。大きな問題は、価値的な差異、教養的差異を含意する場合に、どんな方言で訳すにしても、問題が生じるということです。明示的な意味の部分にそのような差異が表現されている場合には、その方言を馬鹿にしたことになるので避けなければなりません

- 文化圧力・視点の問題（第4章）。「英語らしい文章」「日本語らしい・日本語として自然な文章」とはどのようなものか。どのように説明すれば良いか

それは翻訳というより、文章論の問題です。とくに文章の接続のしかた、接続句などを用いる頻度、視点の入れ方などに関わってきます。

- 翻訳研究の歴史について
- 翻訳研究の有名な論文

【今後さらに検討・議論したい点】

- 文学テキストと実用テキストの境界に位置するようなものがどのくらいあるのか、その種の例をどこまで翻訳論の守備範囲に収めるべきか
- 翻訳研究に関する文献の読書会
- 『ホビット』をめぐる、メディアの相違（文字と映像）の翻訳文法の比較
- 「意味空間」を出発点とした一般翻訳理論について、既に書かれているものがあれば読みつつ、ホビットの言語間翻訳、記号法間翻訳がどう同じ地平で語れるのかを実践してみたい

- 『ホビット』の映像作品を含めた翻訳比較検討
- 「異化翻訳」とブレヒトの「異化効果」の関連
- p. 192で述べられている1~3を、翻訳実践とその結果の分析を通して考えてみたい
- 8章に示される翻訳論の使命の中から「1. 翻訳すべき文学的要素とは何かを究明する」の実践を考えてみるに、実際に本書187頁の翻訳の手順第二段階までを何人かで行い、「零度の訳」と文学的要素とを書き出してみること、もしくは既に訳されたテキストを分析してそこに付け足されている文学的要素を考察してみるのが良いのではないかと考えた。
- 翻訳者の育成に向けて、具体的にどのような取組が可能か。本書で述べられているような言語の機微に敏感になることは、学習によって可能か。（そもそも翻訳者は「育成」できるものなのか。。）
- 学校英語教育における「和訳」の功罪。
- 聖書翻訳について（すでに予定されている企画）
- 日本文学の英訳に関して、時代による翻訳者の意識の変化（cf. p.54）